『比較論理学研究』第5号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2007)

『タルカラハスヤ』に見られるプラジュニャーカラグプタの〈意知覚〉説

小林　久泰

0. はじめに

仏教論理学派の最後期に著されたと推測される作者不詳の綱要書『タルカラハスヤ』(TR) の批判的校訂サンスクリットテキストが、２００５年に矢板秀臣氏により公表された。TR は、仏教論理学派の様々な論書からの引用を豊富に含んでおり、仏教認識論・論理学を研究する上で非常に有益な資料である。矢板氏の分析によれば、TR 作者は、仏教論理学派の思想家のうち、特にプラジュニャーカラグプタを重要視していたようである。その証左として、矢板氏は、「知覚の分類」章のうちの〈意知覚〉の定義をめぐる議論を取りあげ、そこで TR 作者が〈意知覚〉の定義をダルマキールティの『ニヤーヤ・ビンドゥ』(NB) によって示した後、ダルモーッタラの『ニヤーヤ・ビンドゥ・ティーカー』(NBṬ) を抜粋しつつも、このダルマキールティの定義をプラジュニャーカラグプタの『プラマーナ・ヴァールティカ・アランカーラ』(PVA) における定義と整合させようと試みていることを指摘している[1]。

TR 作者がダルモーッタラよりもプラジュニャーカラグプタにより近い立場にいたのではないか、という矢板氏の分析はおおむね正しいように思われる。しかし、TR に提示される〈意知覚〉をめぐる議論についての矢板氏の理解は、テキストの問題も含め、正確さを欠く点もある。特に、TR の原文をそれに類似する NBṬに従って書き改めている箇所は訂正を要しよう。

[1]矢板氏の分析については、矢板 [2005: 58-62] および矢板 [1996: 66] を参照されたい。

本稿は、TR に見られる〈意知覚〉の定義をめぐる議論をいま一度検討し直し、TR 作者の意図をより一層明らかにするとともに、プラジュニャーカラグプタの〈意知覚〉理解がどのようなものであったのかを解明することを目的とする。

1. 〈意知覚〉の定義

1.1. まずはじめに、議論の出発点となるダルマキールティの〈意知覚〉の定義を提示しておこう。ダルマキールティは、NB 知覚章において四種の知覚を列挙する中で、〈意知覚〉を次のように定義する。

> NB I 9 (TR 29*,3-4): svaviṣayānantaraviṣaya-sahakāriṇendriyajñānena samanantarapratyayena janitaṃ tan manovijñānam[2] /
>
> [〈感官知〉あるいは〈意〉] 自身の対象の直後の対象を共働因とする〈感官知〉という等無間縁によって生み出されるもの、それが〈意知覚〉(manovijñāna) である。

まず問題となるのは、ここで言われている「自身の対象」(svaviṣaya) とは何かということである。この点に関して、NB の注釈者ダルモーッタラと TR 作者との間に見解の相違が見られる。前者がそれを「〈感官知〉自身の対象」と理解するのに対して、後者は「〈意〉自身の対象」と

[2]tan manovijñānam NB; manovijñānam TR. PVA にもこの NB と類似した表現が見られる。See PVA 305,1: mānasam apīndriyavijñānena svaviṣayānantaraviṣayasahakāriṇā janitam pratyakṣam / なお、このプラジュニャーカラグプタの文章は、NVV I 525,3-4 に引用される。

理解する。この後者の理解はプラジュニャーカラグプタの見解を考慮したものと考えられる。以下、その詳細を検討していく。

1.2. ダルモーッタラは上述のNBを次のように説明している。

NBṬ 58,1-4 ad NB I 9: **sva** ātmīyo **viṣaya** indriyajñānasya, tasy**ānantaraḥ**, na vidyate 'ntaram asyeti / antaraṃ ca vyavadhānaṃ viśeṣaś cocyate / tataś cāntare pratiṣiddhe samānajātīyo dvitīyakṣaṇabhāvy upādeyakṣaṇa indriyavijñānaviṣayasya gṛhyate / tathā ca satīndriyajñānaviṣayakṣaṇād uttarakṣaṇa ekasantānāntarbhūto gṛhītaḥ / sa **sahakārī** yasy**endriyajñānasya** tat tathoktam /

『自身の』(sva = ātmīya)『対象』、つまり、〈感官知〉(indriyajñāna) にとっての、ということである。それの『直後』、つまり、それに隔たり (antara) がないということである。そして、隔たりとは、隙間 (vyavadhāna) と［質的］相違 (viśeṣa) と［であると］いわれる。そしてそれ故、隔たりが否定される場合、〈感官知〉の対象の同類であり、［〈感官知〉の対象の直後の］第二刹那に生じる、質料果である刹那が把握される。そしてそのような場合には、同一の相続中に含まれる、〈感官知〉の対象の刹那よりも後の刹那が把握される。『ある〈感官知〉にとって』その［〈感官知〉自身の対象の直後の対象］が共働因であるような、その［〈感官知〉］がそのように［svaviṣayānantaraviṣayasahakārin と］言われる。

ここでダルモーッタラはNBの svaviṣaya という語を「〈感官知〉の対象」と理解している。便宜のため、今問題となっている状況を図示すると次のようになろう。

第1刹那	対象$_1$	
第2刹那	対象$_2$	〈感官知〉
第3刹那		〈意知覚〉

異時因果を唱える経量部にとって、知を生み出す対象は必ず一刹那前に存在する。従って、「〈感官知〉自身の対象」とは第1刹那に属する対象$_1$のことであり、「〈感官知〉自身の対象の直後の対象」とは、〈感官知〉と同じ第2刹那に存在する対象$_2$のことである。この対象$_2$が〈感官知〉の共働因となって、第3刹那の〈意知覚〉が生じるのである。

1.3. ところで、ダルマキールティは『プラマーナ・ヴァールティカ』(PV) の中でも〈意知覚〉に対してNBと同様の説明を与えている。

PV III 244ab: svārthānvayārthāpekṣaiva hetur indriyajā matiḥ /

まさに［〈感官知〉］自身の対象に後続する対象を期待するような、感官から生じた知［すなわち〈感官知〉］が［〈意知覚〉の］原因である。

ここで言われている「自身の対象に後続する対象」(svārthānvayārtha) とは、NBで言われるところの「自身の対象の直後の対象」(svaviṣayānantaraviṣaya) と全く同じものであることは言うまでもない。

さて、上記のPVをプラジュニャーカラグプタは次のように説明している。

PVA 305,33-306,1: **svārtha** indriyavijñānasya, prathamaḥ prabandho vā / tad**anvayo** yo 'rthakṣaṇas tad**arthāpekṣam** evendriyavijñānam mānasaṃ janayati /

『自身の対象』とは、〈感官知〉にとっての、ということであり、それは第1［刹那］か、連続 (prabandha) かのいずれかである。それに『随伴する』[3]対象の刹那、『まさに』そのような『対象を期待するような』〈感官知〉が〈意［知覚］〉(mānasa) を生み出す。

この説明から明らかになるのは、プラジュニャーカラグプタも、ダルモーッタラと同じく、「自身の対象」(svārtha = svaviṣaya) を「〈感官知〉自身の対象」と考えているということである。ただし、プラジュニャーカラグプタの見解は、〈感官知〉自身の対象として、上記の図で示したところの第1刹那に属する対象$_1$だけでなく、連続、すなわち相続としての対象も考慮している点で、ダルモーッタラの見解とは若干異なる[4]。この点については後に検討しよう。い

[3] Y(D215a4; P290a8): **de'i rjes su 'gro ba'i** zhes bya ba ni des bskyed pa'i'o // (「『それに後続する』とは、それによって生み出される、ということである」)

[4] デーヴェーンドラブッディをはじめとする他の注釈者たちは、このPVの svārthānvayārthāpekṣaiva という語句に対して、次のような説明を与えている。これらの注

ずれにせよ、「〈感官知〉自身の対象に随伴する対象」として、上記の図で言えば、〈感官知〉と同じ第２刹那に存在する対象$_2$とされるものがプラジュニャーカラグプタによっても考えられていることは明白である。

2. TR 作者の〈意知覚〉理解

2.1. ダルマキールティが用いる「自身の対象」という表現を「〈感官知〉自身の対象」とみなす以上のような解釈に対して、TR 作者は全く別な解釈を与える。まず彼は上述の NB I 9 を引用した直後に、次のようなプラジュニャーカラグプタの詩頌を、わずかな改変とともに、提示している。

TR 29*,5-6: idam ityādi yaj jñānam abhyāsāt purataḥ sthite /
sākṣatkaraṇato bhāṣye[5] pratyakṣaṃ mānasaṃ matam // (Cf. PVA 305,4 (k. 443))

現前にある［外的な事物］に関して、反復経験から、「これ」などという認識が［起こる］が、［その認識の］直接的な働き（sākṣātkaraṇa）に基づいて、［その認識を］『バーシャ』では[6]〈意知覚〉とみなしている[7]。

すでに小林 [2008] でも指摘したように、プラジュニャーカラグプタにとって〈意知覚〉とは、外界の事物を「これ」というかたちで捉える、ある種概念知とも呼ばれ得るような認識に他ならない[8]。PVA の注釈者ジャヤンタの説明によれば、この詩頌では、「『これ』などという」(idam ityādi) という表現によって、〈意知覚〉が〈感官知〉とは異なる認識対象 (dmigs pa, *ālambana) を持つことが、そして、「反復経験から」(abhyāsāt) という表現によって、〈意知覚〉が〈感官知〉とは異なる根拠を持つことが、さらに、「現前にある［外的な事物］に関して」(purataḥ sthite) という表現によって、〈意知覚〉が直接知覚 (pratyakṣa) であることの根拠がそれぞれ示されているようである[9]。このようなプラジュニャーカラグプタの〈意知覚〉理解は、ダルマキールティの論述には見られないものである。

さて、上述の詩頌を提示した後、TR 作者は

釈には、svārtha という語に対するプラジュニャーカラグプタのような「〈感官知〉にとっての連続した対象」という解釈は見いだせない。See PVP(D202a2-3 P236a3-4): de yid kyi rnam par shes pa 'di'i mtshungs pa de ma thag pa rkyen nyid kyi rgyu yin no // dbang po'i blo de de ma thag pa'i rkyen du 'dod pa'i skad cig ma **rang gi don** de rang gi yul gang yin pa de'i **rjes su 'gro ba** de'i rgyu can gang yin pa de ni de ma thag tu byung ba'i ngang tshul can gyi yul lhan cig byed pa'i rgyu des zhes bya ba'i don to // (「その［〈感官知〉］はこの〈意知覚〉にとって等無間縁という原因である。『自身の対象』(rang gi don = rang gi yul) とは、等無間縁とみなされるその〈感官知〉の刹那のことである。それに『後続する』、すなわち、それを原因とする。そのようなものは直後に生じるという傾向性を持つ対象である。そういった共働因［を期待するような〈感官知〉]、という意味である」) ; R(D100a5-6; P121a7-8): **rang gi don** ni dbang po'i shes pa'i gzung (D; bzung P) ba skad cig dang po ste / de nyid kyi **rjes su 'gro ba**'i rgyu gang la yod pa de'i **don** de la **ltos** (D; bltos P) **pa can gyi dbang po las skyes pa'i blo ni** yid kyi **rgyu** yin no //; (「『自身の対象』とは〈感官知〉が把握する刹那のことである。まさにそれに『後続する』、すなわち、それを原因とする、その『対象』、それを『期待するような〈感官知〉が』〈意知覚〉の『原因である』」) PVV 192,24-25: **svārthaḥ** svakīyo viṣayas tasmād **anvaya** utpādo yasy**ārthasya** tad**apekṣaiva** **indriyajā matir** manovijñānasya **hetur** iṣyate / (「『自身の対象』(svārthaḥ = svakīyo viṣayaḥ)、それに『後続する』、すなわち、それから生起する『対象』、『まさに』それを『期待するような〈感官知〉が』〈意知覚〉(manovijñāna) の『原因である』と認められる」)

[5] sākṣātkaraṇato bhāṣye TR$_{M}$; sākṣātkaraṇato bhāvye TR$_{Sh}$, sākṣātkaraṇatas tat tu PVA, TR.（TR の写本の読みは矢板 [2005] の注で挙げられているものを参照した。）なおこのプラジュニャーカラグプタの詩頌は NVV I 119,6-7 にも引用される。

[6] テキストの問題として指摘しておきたいのが、矢板氏の刊本では、写本の読みが bhāṣye であるにもかかわらず、引用元の PVA の記述に従って tat tu と訂正されていることである。しかし、写本に根拠がある以上、むしろ、ここで TR 作者はプラジュニャーカラグプタの詩頌を一部変更し、このような〈意知覚〉理解が『バーシャ』すなわち PVA に書かれていることを意図的に示したと考える方が自然であろう。なお、TR において PVA が「バーシャ」(bhāṣya) と呼ばれることについては、矢板 [2005: 58; n. 61] を参照。

[7] プラジュニャーカラグプタ自身は、この詩頌を次のように散文で言い換えている。PVA 305,5: idam iti purovartini sākṣātkaraṇākāreṇa pravartamānaṃ mānasam pratyakṣam / (「『これ』というように、現前のものに関して、直接的な働きというあり方で起こっている［認識］が〈意知覚〉である」)

[8] プラジュニャーカラグプタの〈意知覚〉理解については、Tillemans [1989], 林 [2001] も参照されたい。

[9] J(D93b3; P106a6-7): dbang po'i mtshan nyid dang mi mthun pa'i dmigs pa bstan pa ni **'di'i zhes sogs** zhes bya ba'o // shes pa de'i rgyu mtshan nyid mi mthun par bstan pa ni **goms pa las** zhes [em.; om. zhes D, P] bya ba'o // mngon sum nyid kyi rgyu mtshan bstan pa ni / **mdun du gnas pa la** zhes bya ba'o //

次のように述べている。

TR 29*,7-11: **sva** ātmīyo[10] **viṣayo** manasaḥ,[11] tasy**ānantaro** nirantaro **viṣayo** manasa eva / anena punaḥpunarāvartanaṃ viṣayasyābhyāsa uktaḥ / tat**sahakāriṇendriyajñānena samanantara-pratyayene**ti purataḥ sthitatvam uktaṃ viṣayasya / niyatārthasamanantarapratyayajanitatvena sākṣātkaraṇam abhilakṣitam /

『自身の』(sva = ātmīya)『対象』、つまり、〈意〉(manas) にとっての、ということである。それの『直後の』(anantara = nirantara)『対象』、つまり同じ意の[対象]のことである。この[ダルマキールティの表現]によって、対象が何度も何度も繰り返されること、すなわち[プラジュニャーカラグプタが言うところの]「反復経験」(abhyāsa) が述べられている。『その[自身の対象の直後の対象]を共働因とする〈感官知〉という等無間縁によって』という[ダルマキールティの表現によって]、[プラジュニャーカラグプタが言うところの]対象の「現前性」が述べられている。[ダルマキールティが提示する]特定の事物[を共働因とする]等無間縁によって生み出されるものであることによって、[プラジュニャーカラグプタが言うところの]「直接的な働き」(sākṣātkaraṇa) が示されている。

ここでTR作者が提示しているのは、ダルマキールティのNBの記述とプラジュニャーカラグプタの上述の詩頌との対応である。注目すべきは、ダルマキールティのNBに見られる「自身の対象」という語に対し、TR作者が「〈意〉自身の対象」という独自な解釈を与えていることである。まず、テキストの問題を指摘しておくが、矢板 [1996: 76, n. 9] は「写本/Sh が manasaḥだが、内容上から、また構文上から indriyajñānasya と訂する」とし、矢板 [2005] の校訂サンスクリットテキストにおいても、先に検討したダルマモーッタラのNBṬの記述を根拠に、写本に支持されない indriyajñānasya という読みを manasaḥという語に対してそのまま与えている。しかし、これは訂正されなければならない。TR作者は、ここでダルマキールティの「自身の対象の直後の対象」という表現によって、対象が何度も繰り返されること、すなわち、上述のプラジュニャーカラグプタの詩頌に見られる「反復経験」が意図されていると理解しているのであって、ダルモーッタラの解釈を与えているのでは決してない[12]。むしろ注目すべきは、TR作者がダルマキールティのNBを、ダルモーッタラのNBṬに従うのではなく、プラジュニャーカラグプタのPVAに従って理解しているということである[13]。

2.2. 以上のように、TR作者は、NBに見られる「自身の対象」という語に対し、「〈意〉自身

[10]sva ātmīyo TR; sukhātmīyo TR_{Sh}.

[11]manasaḥ TR_M, TR_{Sh}; indriyajñānasya TR.

[12]TR の記述と NBṬの記述が非常に似ているのは事実である。興味深いことに、svaviṣayānantara という複合語の分析だけでなく、「反復経験」に対する「何度も何度も繰り返されること」(punaḥpunarāvartana) という説明も、別の箇所に対する注釈であるが、NBṬに類似表現を求めることができる。See NBṬ 142,10-11 ad NB II 44: tasyābhyāsaḥ punaḥpunarāvartanam /; DhP 143,12-14: upalambho dvividho vācyarūpo vācakarūpaś ca / ata evāvartanam api dvedhā śabdarūpāvartanam arthāvartanaṃ ca / tatrārthāvartanaṃ punaḥ punaś cetasi niveśanam / śabdāvartanaṃ punaḥ punar uccāraṇam /

[13]本稿の内容とは直接関係しないが、以下のことも指摘しておきたい。矢板 [2005: 61][1996: n. 24] では、TR作者とダルモーッタラの意見が矛盾している一例として、共働因 (sahakārin) に対する両者の理解が扱われている。矢板氏は、TR作者が共働因を「相互に扶助し合うもの」(parasparopakārin) として理解する (see TR 29*,20: paras-paropakāritvena ca sahakāritvam.) のに対して、ダルモーッタラは「同じ結果をもたらすもの」(ekakāryakārin) と理解していると指摘する。問題の記述は以下のものである。NBṬ 58,4-6 ad NB I 9: dvividhaś ca sahakārī, parasparopakārī ekakāryakārī ca / iha ca kṣaṇike vastuny atiśayādhānāyogād ekakāryakāritvena sahakārī gṛhyate / viṣayavijñānābhyāṃ hi manovijñānam ekaṃ kriyate yatas tad anayoḥ parasparasa-hakāritvam / (「また、共働因は二種である。[一つは]相互に扶助し合うもの (parasparopakārin) であり、[もう一つは]同じ結果をもたらすもの (ekakāryakārin) である。そして、この[〈意知覚〉の]場合、[それぞれ]刹那滅するものに対して[どちらかに]卓越性を付与することは不合理であるから、共働因は同じ結果をもたらすものとして捉えられる。実に、対象と認識との両者によって、同じ〈意知覚〉[という結果]がもたらされるのだから、従って、これら両者は相互に共働因となるのである」) このNBṬでダルモーッタラは、認識と対象が相互に扶助し合うものとみなされる根拠として、それらが同じ結果をもたらすことを述べているのであり、ダルモーッタラも、第二義的なものとしては、「相互に扶助し合うもの」としての共働因を認めているのである。従って、このNBṬの記述は、TR作者とダルモーッタラの見解の相違を積極的に示すものとはならない。See also DhP 58,27-29: parasparopakāritayā ca sahakāritvam ekatvādhyavasāyādhīnaṃ santānagatam amukhyam / mukhyaṃ tu ekārthakriyākāritvena /; DhP 59,15-16: anyonyasya sahakāritvam ekārthakriyākāritveneti prakaraṇāt /

の対象」という解釈を与えることで、プラジュニャーカラグプタの言明とダルマキールティの言明が整合することを示している。しかし、先の検討では、PV に対してプラジュニャーカラグプタ自身が与える解釈は「〈感官知〉自身の対象」というものであった。それでは、TR 作者の説明はプラジュニャーカラグプタ自身の見解と矛盾しているのだろうか。

この問題について、指摘しておかなければばならないのは、プラジュニャーカラグプタにとって、「これ」というかたちの認識、すなわち〈意知覚〉は、〈感官知〉の対象となるような外的なものに関してのみ起こるのではない、ということである。彼は、〈自己認識〉の対象となるような、楽などという内的なものに関しても〈意知覚〉が起こると考えるのである[14]。

PVA 308,20-23: athāpi pratibhāsamāna eva prabandhena sukhādāv idaṃ sukhādīti yadā vijñānam adhimuktirūpam upajāyate, tadā kasmān na savikalpakatā / atra mānasaṃ pratyakṣam artha iveti varṇitam / tathā hi /

> artharūpe sukhādau ca yadedam iti vartate /
> svarūpagrahasākṣāttve sarvaṃ tan mānasam matam //474//

【反論】連続して (prabandhena) まさに顕現している楽などに関して、「これは楽などである」という、確信 (adhimukti) を本質とした認識が生じるとき、[その認識が] どうして有分別でないだろうか。
【答論】この [顕現している楽など] に関する[15] [「これ」という認識も]、[外界] 対象に関する [「これ」という認識] と同じく、〈意知覚〉である、と述べられる。すなわち、
対象それ自体、および楽など [それ自体] に関して、「これ」という [認識] が起こるとき、[それら対象や楽など] それ自体の把握[16]は直接的であるから、そのような [認識] はすべて、〈意 [知覚]〉(mānasa) である、と考えられる。(474)

ここで注目すべきは、「連続して」(prabandhena) という表現である。先に、プラジュニャーカラグプタが、ダルモーッタラとは異なり、NB で問題となる「〈感官知〉自身の対象」として、刹那としての対象だけでなく、「連続」、すなわち相続としての対象を想定していることを指摘した。今問題としている〈自己認識〉の対象である楽などに関しても、プラジュニャーカラグプタは、〈感官知〉の対象と同じく、相続としての対象を想定していることは明らかである。「連続してまさに顕現している楽など」というこの表現によって、プラジュニャーカラグプタもまた、TR 作者が提示するところの「〈意〉の対象の反復経験」を想定していたのではないだろうか。さらに言えば、プラジュニャーカラグプタが、ダルマキールティが述べる「自身の対象」という表現に対して、わざわざ「連続」(prabandha) という第二解釈を与えているのは、TR 作者が示すように、反復経験を意図してのことであると考えることもできよう。

3. 〈意知覚〉における反復経験の役割

3.1. それでは、そもそも、プラジュニャーカラグプタは反復経験をどのように考え、その反復経験と〈意知覚〉とのかかわりをどのように考えていたのだろうか。

プラジュニャーカラグプタはまず、眼などの感官と反復経験との違いを次のように説明している。

PVA 305,5-7: atha cakṣurvyāpārād upajāyamānaṃ cākṣuṣam eva / na, rūpapratibhāsamātre cakṣuṣa upayogo 'bhiniveśe tu pūrvābhyāsasya / tena, cakṣuṣo 'tra vyāpārābhāvāt, manasaḥ pūrvābhyāsalakṣaṇād utpatteḥ, mānasaṃ pratyakṣam etat /

【反論】眼の働きから生じているものは眼による [認識] に他ならない。
【答論】そうではない。眼は色の顕現のみ (rūpapratibhāsamātra) に対して有用であり、他方、先行する反復経験 (pūrvābhyāsa) は確定 (abhiniveśa) に対して [有用である]。従って、この [確定] に対して眼は働かないので、[眼からではなく] 先行する反復経験を特質とする意から生じるのだから、これは意による知覚である。

ここでプラジュニャーカラグプタは、眼が色の顕現に関与するのに対して、反復経験は確定に

---

[14] 詳細については、小林 [2008] を参照されたい。

[15] Y (D217a6; P293b1): **'di la** zhes bya ba ni bde ba la sogs pa'o // (「『これに関する』とは、楽など [に関する]、ということである」)

[16] Y (D217a6-7; P293b1): **rang bzhin** zhes bya ba ni don gyi rang bzhin 'dzin pa dang bde ba la sogs pa'i rang bzhin 'dzin pa'o // (「『それ自体 [の把握]』とは、対象それ自体の把握と楽などそれ自体の把握、ということである」)

関与することを述べている。ヤマーリによれば、ここで言われている「確定」(abhiniveśa) とは、「『これ』という判断」のことである[17]。眼だけからは「これ」という判断は直接起こらず、先行する反復経験があってはじめて、「これ」という判断が成立するというわけである。そして、意 (manas) が、その反復経験と特質とするものと理解されている。

しかし、眼によって対象の形象が把握されるなら、わざわざ対象を「これ」というように判断する必要はないのではないか。このことについてプラジュニャーカラグプタは次のように述べている。

PVA 305,8-9: athāpi syāt / tadākārasya cakṣurādivijñānenaiva grahaṇāt mānasam vyartham / na vyartham / adhimukter adhikāyāḥ sambhavāt / idam ity eva kṛtvā pravartate / tena pravartakatvāt pramāṇam /

また、[次のように] 考えるかもしれない。
【反論】その [対象] の形象はまさに眼などによる認識によって把握されるのだから、意による [認識] は無意味である。
【答論】無意味ではない。何故なら、[意による認識には] 付加的なものとして確信 (adhimukti) があるから。まさに「これ」と考えた上で、[人は] 行動を起こす。従って、行動を起こさせるもの (pravartaka) であるから、[意による認識は] プラマーナである[18]。

プラジュニャーカラグプタによれば、一般に、ただ対象の形象を捉えるだけでは人は行動を起こさず、対象を「これ」と確信してはじめて、人は行動を起こす。そのため、〈感官知〉だけではなく、〈意知覚〉が必要とされるのである。

3.2. ところで、プラジュニャーカラグプタは、「これ」という判断がなくとも、〈感官知〉だけで行動が起こるという例外的な場合も考慮し、次のように説明する。

PVA 305,10: indriyajñānaṃ tarhi pravartakaṃ na syāt / na, atyantābhyāsād anyavikalpane 'pi vṛtteḥ pramāṇam eva /

【反論】それでは [すなわち、〈意知覚〉が行動を起こさせるものであるならば]、〈感官知〉は行動を起こさせるものでなくなってしまうだろう。
【答論】そうではない。幾度となない反復経験 (atyantābhyāsa) に基づいて、他のことを考えていても[19]、[〈感官知〉だけで、人は] 行動を起こす [場合もある]。従って、[〈感官知〉もまた、行動を起こさせるものであるから] プラマーナに他ならないのである。

ここで言われている「幾度となない反復経験」とは、高度の習熟を意味し、「これ」という認識を引き起こす反復経験よりもさらに強力なものと考えられる。何度も何度も繰り返し経験されたものに関しては、「これ」という判断を起こさなくても、〈感官知〉によって捉えられた対象に対して人は行動を起こすことができる。言い換えれば、幾度となない反復経験があってはじめて、〈感官知〉も、人に行動を起こさせるものとなり、プラマーナと呼ぶことができるのである[20]。

以上の論述から言えるのは、プラジュニャーカラグプタにとって反復経験とは、眼などの感官によってはもたらされないような、対象についての「これ」という確信、すなわち〈意知覚〉を引き起こす原因であるということである。ま

---

[17] Y(D213b6; P288b3-4): **'dzin pa la** zhes bya ba ni / 'di zhes bya bar (D; zhes par P) lhag par zhen pa ste / de la ni sngar gyi goms pa'i byed pa 'jug pa yin no // des na 'di mig las byung ba ji ltar yin zhes dgongs pa'o // (「『確定』とは、「これ」という判断のことである。その [確定] に対しては、先行する反復経験の働きが起こる。従って、どうしてこの [認識] が眼から生じるものであろうか、ということが意図されている」) なお、『唯識三十論』(TrBh) では「確信」(adhimokṣa 勝解) を abhiniveśa という表現で説明する箇所がある。TrBh 25,27-29: . . . yenaivākāreṇa tan niścitam anityaduḥkhādyākāreṇa tenaivākāreṇa tasya vastunaś cetasy abhiniveśanam evam etan nānyathety avadhāraṇam adhimokṣaḥ / (「無常や苦などのかたちでその [実在] が決定されるときに、全く同じありかたでその実在を心に確定すること、つまり『これはこのようであって、別様ではない』というように限定すること、それが確信である」)

[18] 仏教論理学派におけるプラマーナ論と行動のかかわりについては Oki [1999] を参照されたい。

[19] Y(D213b7-214a1; P288b4): **shin tu goms pa las** rnam par rtog pa med pa kho nar ro // **gzhan rnam par rtog par na** ste de'i yul can gyi rnam par rtog pa med par **yang** ngo // (「『幾度とない反復経験に基づいて』無分別知だけで。『他のことを考えていても』とは、それを対象とする分別知がなくても、ということである」)

[20] 仏教論理学派の真理論、特にシャーキャブッディの真理論において、この「幾度とない反復経験」という概念が重要な役割を担うことについては、稲見 [1993]、小野 [1994] を参照されたい。

た、プラジュニャーカラグプタにとって、反復経験は人の行動を成立させるための前提とされている。〈感官知〉もまた、幾度とない反復経験を通じてはじめて行動を起こさせるものとなるのだから、〈感官知〉であれ、〈意知覚〉であれ、それらの認識がプラマーナとみなされ得るのは、「反復経験」があるからこそ、なのである[21]。

なお、残念ながら、プラジュニャーカラグプタが〈意知覚〉と反復経験のかかわりについて言及しているのは外的な対象のみであって、内的な対象の反復経験と〈意知覚〉との具体的関係については直接的説明がない。しかし、プラジュニャーカラグプタが内的な楽などという対象に関しても、「連続」(prabandha) ということを問題としている以上、TR 作者が述べるような「〈意〉の対象の反復経験」というものを考えることも十分可能であると思われる。

4. 結語

プラジュニャーカラグプタは、〈意知覚〉の定義に関して、ダルマキールティには見られない「反復経験」という概念を導入している。興味深いことに、TR 作者は、この概念がダルマキールティによっても説かれていることを示すため、NB における「自身の対象の直後の対象」(svaviṣayānantaraviṣaya) という表現を〈意〉の対象の反復経験を意味するものとして解釈している。この TR 作者の解釈は、「自身の対象」(svaviṣaya) という NB の語句を「〈感官知〉自身の対象」を意味するものとして解釈するダルモーッタラなどの注釈とは一線を画すものであり、一見、プラジュニャーカラグプタ自身の解釈とも異なるように見える。しかしながら、この「〈感官知〉自身の対象」という解釈についても、ダルモーッタラとプラジュニャーカラグプタには見解の相違が見られる。前者がそのような〈感官知〉の対象を刹那に属するものとしてのみ理解していると思われるのに対して、後者はそれに相続としての解釈も与えている。このことを考慮にいれ、TR 作者の解釈を見た場合、彼とプラジュニャーカラグプタの見解は全く食い違っていないことが分かる。むしろ、プラジュニャーカラグプタが、ダルモーッタラと違い、「連続」(prabandha) という解釈も与えていることから考えるに、プラジュニャーカラグプタ自身も、反復経験に相当するものをダルマキールティの定義に読み込もうとしていたのではないだろうか。

[21] このようにプラジュニャーカラグプタによって反復経験が人の行動を成立させる根拠とみなされていることを考えると、彼にとっての〈意知覚〉とは、いわゆる「知覚判断」のようなものであったと考えられる。しかし、通常、仏教論理学派においてこのような知覚判断はプラマーナとは認められない。プラジュニャーカラグプタが知覚判断をどのように位置づけていたのか、ということについては、彼の真理論の解明とあわせ、今後の課題としたい。なお、仏教論理学派における知覚判断については桂 [1989]、沖 [1990] を参照されたい。

略号及び参考文献

DhP Dharmottarapradīpa (Durvekamiśra): Dalsukhabhai Malvania, ed. TSWS 2. Patna 1955. 2nd ed. 1971.

J Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā (Jayanta): Tibetan translation. D4222, P5720.

M Manuscript B of Pramāṇavārttikālaṃkāra: *Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta' s Pramāṇavārttikabhāṣyam.* Shigeaki Watanabe, ed. Patna-Narita: 1998.

NB Nyāyabindu (Dharmakīrti). See DhP.

NVV Nyāyaviniścayavivaraṇa (Vādirāja): Mahendra Kumar, ed. 2 Vols., Jñānapītha Mūtidevī Jaina Granthamālā, Sanskrit Grantha No. 3, 12. Varanasi 1944.

NBṬ Nyāyabinduṭīkā (Dharmottara): See DhP.

PV Pramāṇavārttika (Dharmakīrti): Yusho Miyasaka, ed. Pramāṇavārttikakārikā (Sanskrit and Tibetan). *Acta Indologica* 2 (1971/72): 1-206.

PVA Pramāṇavārttikālaṃkāra (Prajñākaragupta): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. TSWS 1. Patna 1953.

PVP Pramāṇavārttikapañjikā (Devendrabuddhi). Tibetan translation. D4217; P5717(b).

PVV Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. Appendix to *Journal of Bihar and Orissa Research Society.* Patna 1938-40.

R Pramāṇavārttikaṭīkā ad PV III (Ravigupta). Tibetan translation. D 4225; P 5722.

S　Rāhula Sāṅkṛtyāyana's edition of Pramāṇavārttikālaṃkāra. See PVA.

T　Tibetan translation of Pramāṇavārttikālaṃkāra. D4221; P5719.

TR　Tarkarahasya. See 矢板 [2005].

TrBh　Triṃśikābhāṣya (Sthiramati): Sylvain Lévi, ed. Paris 1925.

TR_M　Manuscript of Tarkarahasya.

TR_{Sh}　Paramanandan Shastri's edition of Tarkarahasya. TSWS 20. Patna 1979.

Y　Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Supariśuddhi (Yamāri). Tibetan translation. D4226; P5723.

Oki, Kazufumi

1999 "*pravṛtti* as an Action of a Person." In: *Dharmakīrti's Thought and its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, ed. Shoryu Katsura. Wien: 287-294.

Katsura, Shoryu

1984 "Dharmakīrti's Theory of Truth," *Journal of Indian Philosophy* 12: 215-235.

Tillemans, T. J. F.

1989 "Indian and Tibetan Mādhyamikas on mānasapratyakṣa," *The Tibet Journal* 14: 70-85.

稲見正浩

1993 「仏教論理学派の真理論—デーヴェーンドラブッディとシャーキャブッディ—」(渡辺文麿博士追悼記念論集『原子仏教と大乗仏教』下巻 85–118)

沖　和史

1990 「ダルモーッタラ著『正理一滴論註』(*Nyāyabinduṭīkā*) 第一章における知覚判断」(仲尾俊博先生古稀記念『仏教と社会』137–160)

小野　基

1994 「プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の解釈—プラジュニャーカラグプタの真理論—」(『印度学仏教学研究』42-2: 885–878)

桂　紹隆

1989 「知覚判断・疑似知覚・世俗知」(藤田宏達博士還暦記念論集『インド哲学と仏教』533–553)

小林久泰

2008 「仏教論理学派における知覚の分類再考」(『印度学仏教学研究』56-2 掲載予定)

戸崎宏正

1979 『仏教認識論の研究　上巻』大東出版社

林　慶仁

2001 「意知覚発生の時機に関する三つの説—特に Prajñākaragupta 説を中心に—」(『印度学仏教学研究』50-1: 324–321)

矢板秀臣

1996 「Tarkarahasya 研究 (IX):現量の種類」(『成田山仏教研究所紀要』19: 65–121)

2005 『仏教知識論の原典研究　瑜伽論因明、ダルモッタラティッパナカ、タルカラハスヤ』成田山新勝寺

(こばやし　ひさやす, 日本学術振興会)

(平成19年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部)